



## 『安心感』

2月から3月初旬にかけて、羅臼町ではエゾシカの有害駆除が行われています。私も猟友会の一員として毎年参加しており、気がつけば今年で12年になります。

最初のきっかけは、現在の猟友会会長から「鹿の追い立て役（勢子“せこ”と言います）をやってみないか」と声をかけられたことでした。自転車レースに向けた冬のトレーニングになるのでは、と軽い気持ちで参加したのを覚えています。実際はスノーシューを履いて山を登り、雪の中を歩き回るなかなか厳しい活動でしたが、普段見ることのない山の景色、そしてそれまで知らなかった有害駆除の現場に触れ、新しい世界を知る時間でもありました。

駆除の際にはたまに「賄い」として鹿肉をいただきます。この鹿肉が、私にとってはとても大切な意味を持っています。つい先ほどまで山を駆けていたエゾシカが、その場で止められ、解体され、調理され、食卓に並ぶ。その一連の流れを自分の目で見る事ができる。そこに私は、不思議なほどの“安心感”を覚えます。

初めて参加した時は、特に強い感動がありました。自分の身体に入るものが、どのような過程を経てここにあるのかを知ること。それは家庭菜園や自給自足をしている方にも通じる感覚かもしれません。同時に、命をいただくことの「重さ」も確かに感じます。

私たちが日常で口にする多くのものは、その過程が見えません。あることが当たり前のように並んでいます。すべてを知ることにはできませんが、そのごく一部でも自分の目で確かめられたことは、私にとって大きな財産です。

有害駆除に参加して2年後、銃の所持許可を取得しました。ハンターとしての活動は決して楽ではありませんが、充実感や安心感、そして地域に必要とされる役割を担っているという実感があります。身体が動く限り、関わっていこうと思っています。

幼稚園教諭として子どもと向き合い、ハンターとして自然の命と向き合い、そして今は施設長として人生の終盤に寄り添う立場にあります。振り返れば、常に「命」と隣り合わせの仕事をしてきました。

では、ふくろうの郷で働くスタッフは、どのような思いで入所者の方々に向き合っているのでしょうか。介護という仕事は、自分たちに何を与えてくれているのか。そして私たちは、何を与えているのか。

日々の業務に追われる中で、そこの立ち止まって考える機会は多くないかもしれません。それでも現場を見ていると、スタッフの多くが理屈よりも先に、持ち前の「人間性」で動いていることに気づきます。相手のために自然に身体が動く。その姿に、私は何度も心を打たれます。

管理職として采配を振るいながらも、どこかで「心地よい敗北感」を味わっています。私には敵わない力が、現場には確かにあるからです。

ふくろうの郷の“安心感”は、制度や設備だけではなく、そうしたスタッフ一人ひとりの積み重ねによって生まれています。そのことを、あらためて感じるこの頃です。